

## 種子島牧場植物誌

### 一、位 置

農學得業士 内 藤 喬

種子島は九州山系の一塊片にして大隅海峡を東南に距ること凡そ六十八軒鹿兒島港を距る約海上六十二哩、北緯三十度十九分より同三十度五十分に至る、山系の走向に従ひて地層及び島形共に北々東より南々西に延長し南北約十二里、其の北部と南部は幅稍廣し、現時本島を三分して北種子、中種子、南種子の三村を設く、我が種子島牧場は實に其の北種子村の中央に位置し東西兩海岸には各約一里にして達すべし、本島の首邑西の表は其の西海岸にあり牧場より一里餘、隔日鹿兒島に航する汽船の便あり。牧場の北部は中宇都及御殿開にして中宇都川を以て境し東方一帯は鬼ヶ澤及び鬼ヶ澤山によりて北種子村大字安納と境す、西部は西の表の民地及官林と境し南方は大字横山及び櫛ヶ峰に接す、全體東北より西南に長さ楕圓形を呈し總面積約四百町歩なりとす。

### 二、地勢及び地質

種子山は地勢一般に低原の狀をなし自ら北、中、南部に分る、就中北部最も高く住吉の北方に於て三百六十六米の高距を有し小地積の高地帯を形成し周圍に向ひて緩斜せり、我が牧場の地は實に其の丘陵起伏せる所にありて地相自ら單一ならず。

本島を構成せる岩石は即ち九州山系の外帯をなせる第三紀の岩石を主體とし砂岩粘板岩、礫岩等より成れり、而して第四紀の平野は海岸近くに於て發達の相を呈せり、一般に大森林をなす所少なきも其の繁茂著しきは中種子村なりとす。  
 牧場は全く第三紀の岩石を基盤とし其の風化によりて砂質壤土を構成し其の表層約五六尺は酸化作用を受けて赤褐色を呈し一部赤褐色の粘土を混ぜる部分もあり、然れども表面は永年間の植物性腐敗物質の堆積によりて生じたる腐植質ありて黒灰色を呈す、又場内所々に母岩たる砂岩の露出せるを見ることあり、本牧場の土壤に付きて嘗て本校農科三年生數名の分析せし結果を見るに左の如し(校友會々報第四號參照)

一、器械的分析成績

(イ)原土百分中組成分

粒	徑	表	土	心	土
一〇耗以上			〇・八五		一・三二
一〇—八耗			〇・八三		〇・四七
八—六耗			〇・四二		〇・五一
六—四耗			〇・六〇		〇・五七
石礫合計			二・一五		二・八七
四耗以下(細土)			九七・八五		九七・一三
〇・五耗以下(細微土)			八四・九九		七八・二二

(口) 細土百分中組成分

粒	徑	表	土	心	土
四〇—二〇耗			一〇四		一〇四
二〇—一〇耗			三八八		五七五
一〇—〇五耗			九七八		一二六八
〇五—〇二五耗			一九六六		一五二五
〇二五—〇一耗			二〇三九		一八七七
〇一—〇〇五耗			二一・二四		一五六一
〇〇五—〇〇一耗			二一・八二		二六六七
〇〇一耗以下(粗粘土分)			・二・三〇		四三三
〇五耗以下(細微土)			八五三一		八〇五三

(ハ) 細微土百分中組成分

粒	徑	表	土	心	土
〇五—〇二五耗			二二・二七		一八八一
〇二五—〇一耗			二三・三五		二三三一
〇一—〇〇五耗			二三・九九		一九三八
〇〇五—〇〇一耗			二四・七六		三三・一二
〇〇一耗以下			五六三		五三八

二、化學的分析成績

風乾細微土百分中

	表	土	地下二尺	地下三尺
水分	一一・二五	一一・九六	一二・一三	
灼熱の際の消失物	二二・四九	一〇・一九	八・九五	
腐植質	五・二一	一・三〇	〇・九五	
全窒素	〇・一二	〇・〇二	〇・〇二	
鹽酸に不溶物	六八・二六	五五・二三	五六・九一	
鹽酸に不溶礦物質	四七・八二	五三・三〇	五五・〇〇	
鹽酸に可溶硅酸	〇・五九	一・四一	一・〇九	
炭酸ソヂウムに可溶硅酸	四・一一	八・五九	九・七八	
硅酸合計	四・七〇	一・〇〇	一・〇八	
礬土	一一・二六	一二・三六	一一・〇七	
酸化鐵	五・八〇	二・四三	一・四八	
亞酸化鐵	〇・三六	四・六〇	四・五四	
酸化滿俺	〇・六七	〇・四六	〇・三〇	
石灰	〇・三〇	〇・三一	〇・一五	
苦土	〇・三二	〇・三三	一・一二	

加里	曹達	磷酸	硫酸	炭酸	鹽素
〇・一二	〇・〇九	〇・〇七	〇・〇四	三・六六	〇・〇三
〇・〇八	〇・二一	〇・〇六	〇・一四	二・六一	〇・〇二
〇・二二	〇・二五	〇・一四	〇・一一	〇・〇二	〇・〇一

右表に依れば本牧場の土壤は其の腐植質及び全窒素の量に於て他の土壤に比し甚だ多量なりと云はざるべからず、即ち該土壤は實に肥沃良質にして今後有望の土質なるべし。

### 三、氣 候

種子島は暖帶南部の氣候に當り八九月頃暑氣最も烈しく冬季は一二月頃寒氣最も強し、晩霜は三月上旬に及び初霜は十一月初旬に來ることあれども往々年中殆ど降霜を見ざることあり、一般に純島嶼的氣候にして夏は却つて鹿兒島より涼しく冬は亦却つて暖し、雨量は五六月頃に最も多く又毎年九月頃に暴風雨の襲來あるを例とす、今試に大正二年西の表に於ける氣象と同年の鹿兒島の氣象を比較對照すれば左の如し。

月別平均溫度(攝氏) 午前十時

西の表	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
一一・二		一〇・九	一三・〇	一九・六	二二・四	二四・〇	二六・七	二八・〇	二五・七	二三・二	一八・〇	二三・八	一九・四

鹿兒島	七七	八〇	一一〇	一八二	二〇二	二三七	二七二	二八三	二五一	二二三	一五五	九六	一七九
-----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----

月別最高溫度(同)

西の表	一七五	二〇一	二〇一	三〇六	二七六	三二一	三三二	三三二	三二二	三二二	二八五	二〇九	三三二
鹿兒島	一六五	一九四	二〇二	二六四	二七五	二九三	三三九	三三二	三一	二八五	二二〇	二〇九	三三九

月別最低溫度(同)

西の表	二五	一三	二三	一一五	一一九	一七四	一八六	一九九	一五九	一一〇	八〇	五〇	一三
鹿兒島	二〇	三九	一二	九五	一〇五	一五〇	一七二	一八七	一四三	一〇〇	四四	〇四	三九

最高最低較差(絶對較差)

西の表	一五〇	一八八	一七八	一九二	一五七	一三七	一四五	一三三	一六二	二〇一	一六一	一七六	三一九
鹿兒島	一八五	二三三	二二四	一六九	一七〇	一四三	一六七	一四四	一六八	一八五	一七六	二〇五	三七八

月別降水量

西の表	一八八五	一一六二	六九三	一三七九	一三三二	六五六二	二二六〇	八二八	一一〇二	二八四	二四九	一三四一	一九九七
鹿兒島	六七八	五九三	七二七	一六二〇	一四二九	四七六二	一一九二	五三二	二四八	三七七	六七八	一一〇〇	一六〇三

#### 四、牧場内植物状況

牧場は既述の如く丘陵重疊せる地帯にして殆ど平地を存せず只山頂部に於て僅に平互地を見るのみにして全部緩急定まらざる傾斜地をなす、其の大部分は原野にして森林は溪谷河流等に沿へる部分に小面積宛點在し唯東部鬼ヶ澤山に於て稍々廣大なる地區を占領せるを見る。

畑地は原野の緩斜地に開け漸次擴張せらるゝの傾向あり、水田は谷間に沿ひて稍々開けたりと雖も溪水の停滞せるもの冷水の湧出する所等ありて一般に劣等なる水田地なりとす、然れども元來の土質劣悪なるに非ざるが故に草長は可なりに發育せり。

以下植物状況を述ぶるに當り之を便宜上次の如く分ち其の概要を記さんとす。

##### (一) 原野區

牧場の大部分は即ち原野にして牧場として利用せらるゝも亦原野なり、一般に海拔約百米突内外にして風當りよく多少乾燥地の相を呈す、大部分は全く雜草を以て蔽はれ所々に灌木の點在集落せるを見るのみ。

原野の主成分をなす草本次の如し。

ススキ	ヲガルカヤ	メヒジハ
ハギ	イヌガンピ	ヲトコヨモギ
チガヤ	アブラススキ	カハラケツメイ
アキノキリンサウ	ヤマハクカ	ワラビ

等あり、同副成分をなす草本には、

ゼンマイ  
ヒヨドリバナ  
ヲトコヘシ

ヒメノボタン  
ヤハズサウ  
アキノタムラサウ

ネズミノヲ  
テンツキ  
トダシバ

ヤマアザミ  
サハヒヨドリ  
ヲミナヘシ

カウゾリナ  
キンミヅヒキ  
キジムシロ

シラヤマギク  
ナツトウダイ  
キツネノマゴ

ハヒヌメリ  
ヤクシサウ  
ホシダ

コシダ  
ケカモノハシ  
ホソバノヒメトラノヲ

ヌスビトハギ  
ゲンノシヨウコ

等を其の主なるものとし其他尙左の如き多くの種類を有せり。

ツルシノブ  
ツリガネニンジン  
アイナヘ

カナビキサウ  
ウシクサ  
ワレモカウ

ヒメアブラススキ  
オキナグサ  
ゴマクサ

コミカンサウ  
ヒアフギ  
ミツバツチグリ

ドクダミ  
ヨモギ  
ツボクサ

キンエノコロ  
シウメイギク  
ウツボグサ

ギヤウギシバ  
ツハブキ  
コマウセンゴケ



リンダウ	カリマタガヤ	ヒメヒゴタイ
ノヒメユリ	スズサイコ	オトギリサウ
タヌキマメ	ハヒメドハギ	ヒメハギ
ムカゴサウ	ナンバンギセル	クサハギ
ミヤコグサ	ホラシノブ	コブナグサ
ツルボ	スズメノヒエ(禾本)	カタバミ
ヒキオコシ	スミレ等	

一般に原野の高地乾燥せる部分に於ては種類比較的少く主として禾本科草本の占領する所となり之に乾地を好むハギ、ヤハズサウ、メドハギ等の荳科植物を混じ、アリノタフグサ、ワレモカウ、オキナグサ、ツリガネニンジン、ヤマアザミ、ナツトウダイ、キジムシロ、等の草本亦其の間に生育せり、従つて低地、林附近傾斜地等は比較的種類に富み其の發育狀況亦高地のものに比して良好なり。

原野に生ずる草質蔓生類には次の種類を見る。

センニンサウ	エビヅル	ノブダウ
カラスウリ	アマチヤヅル	ボタンヅル
ヘクソカヅラ	アヲツヅラフヂ	ハスノハカヅラ
スヒカヅラ	サネカヅラ	テリハノツルウメモドキ

木質蔓生類には次の如きものあり、

ナハシロイチゴ	ホウロクイチゴ	サルトリイバラ
テリハノイバラ	テイカカヅラ	ナハシログミ
ハマイバラ		

原野中に點在せる灌木類は次の如し。

ヌルデ	イヌザンセウ	ヤツデ
アヂサキ	タラノキ	クヌギ
カシハ	アカメガシハ	ヒサカキ
アキグミ	ヤマヤナギ	ニシキウツギ
クサギ	ハマヒサカキ	カンコノキ
アラカシ	ゴンズイ	イヌビハ

此の中特記すべきは「カシハ」及び「クヌギ」なり、兩者共原野中に群落的に生育せり、「クヌギ」は牧場牛舎の東方傾斜地に二三畝歩許りあり多くは十四五年生のものなり、里人に聞くに播種又は移植したるものに非ず、全く自生なりと云ふ生育良好なるが如し、「カシハ」は管理所の南方斜面牛舎の東方斜面等に單獨的に群落をなし年齢十年内外にして發育は「クヌギ」に比して不良なるが如し、之亦自生なりと云ふ、暖帶の最南部に近き種子島のかゝる地方に於て如斯き落葉樹の自生せるを見るは全く奇とすべく又興味ある事實と云はざるべからず、是れ蓋し土質の然らしむるものなるべく又從來の人爲的影響にもよるべし、即ち下草の刈取頻繁なると共に屢々火入をなしたるものゝ如く爲に常綠樹の生育に不適となり只僅に萌芽力強大なる落葉樹

が其の形骸を残したるものと見るを至當ならんと信ず。

(二) 森林區

小面積の牧場なるが故に勿論深山大森林を見る能はざるも年中温度の比較的高きと降雨量の多きとは相俟ちて森林の構成を容易ならしむるものゝ如く谷間の低地或は傾斜地に於て屢々樹木の集落を見る。

森林として最も價値あるは東部の鬼ヶ澤山の森林にして中央に溪流を挟み樹木よく繁茂して晝尙暗く老木亦少からず、蘭類、羊齒類其他蔓莖類の發育も亦甚だ旺盛にして一見熱帶降雨林の觀を呈せり。

森林を組成する主林木次の如し、

アラカシ	ウラジロガシ	マテバシヒ
シヒノキ	タブノキ	ヤブニクケイ
ヒメユヅリハ	ヤマザクラ	カゴノキ
シロダモ	アコウ	イス
モガシ	イイギリ	カクレミノ
フカノキ	モチノキ	シマサルスベリ
ヤマヒバ	アデク	コセウノキ
コバンモチ	マンリヤウ	ヒサカキ

森林内の亞喬木灌木類次の如し、

森林内の下草は左の如し、

ヤマデキ	タイミンタチバナ	モクタチバナ
ネズミモチ	ムラサキシキブ	ハマクサギ
トキハガキ	カンコノキ	アリドホシ
サクラツ、ジ	カラスザンセウ	トベラノキ
ヤマツバキ	ヤマモモ	クチナシ
シシアクチ	サンゴジュ	モクレイシ
ハマモクコク	サカキ	カンザブロウノキ
タラノキ	ハドノキ	イヅセンリヤウ
ササクサ	ツハブキ	モロコシサウ
ナキリスゲ	センリヤウ	テンナンセウ
フタリシヅカ	タツナミサウ	オホバナスビトハギ
ホシケイ	コ克蘭	フユイチゴ
ヤマビハサウ	クサミズ	ハダカホホヅキ
エゴマ	ヌマダイコン	イヌタデ
オニタピラコ	ヒメクグ	オホバコ
シウブンサウ	ウマノミツバ	カンアフヒ

森林内羊齒類の主なるもの左の如し、

森林内の蔓莖類次の如し、

マメヅタ	ヒトツバ	ベニシダ
ヘラシダ	リウビンタイ	ツルホラゴケ
キンマウキノデ	イハヒトデ	ハチジャウシダ
オホタニワタリ	ヤマワラビ	ヘゴ
ツルアヲキ	イタビカヅラ	トキハカモメヅル
サツマサンキライ	サクララン	ハスノハカヅラ
カラスウリ	キクバドコロ	クズ
カギカヅラ	ヤマノイモ	ツルグミ
ウドカヅラ		

以上の外「クロマツ」及「スギ」あり、クロマツは原野の峯通し或は林際等に於て疎立し數量少きも樹齡は甚だ古きものゝ如く直徑一尺餘に及ぶものあり、一般に松樹には好適の地質状態なるが如し、スギは鬼ヶ澤山の東方山側に林をなすも人工造林によるものゝ如し、發育亦甚だ良好なるが如く見ゆ。

(三) 耕地區

I 畑地

畑地は既述の如く山側緩斜面、低地に於て開けたり、目下蕎麥、甘藷、落花生等を栽培せり、畑地及其の附近の雜草は原野にあるものと多少趣を異にせるを見る、次の如し。

尙新開地なるが故に屢々次の如き雑草の侵入發育せるを見る。

- |            |          |         |
|------------|----------|---------|
| メヒジハ       | ノゲシ      | クハクサ    |
| コミカンサウ     | ヨモギ      | シマニシキサウ |
| イリオモテニシキサウ | アミガササウ   | ハマスゲ    |
| ギヤウギシバ     | キンエノコロ   | コブナグサ   |
| キツネノマゴ     | スズメノヒエ   | ヲトコヨモギ  |
| チガヤ        | ツルボ      | カリマタガヤ  |
| ハヒヌメリ      | チドメグサ    | スミレ     |
| ススキ        | ヲガルカヤ    | ワラビ     |
| シラヤマギク     | スヒカヅラ    | ホラシノブ   |
| ノブダウ       | エビヅル     | ナハシロイチゴ |
| ハギ         | ツリガネニンジン | センニンサウ  |
| ヤマハクカ      | リンダウ     | ヤマアザミ   |
| ヌスビトハギ     | メドハギ     | ヒヨドリバナ  |

II 水田

水田は谷間低濕の地を占むるを以て好濕性の軟弱なる草木の多量に生育せるを見る、水田中の雑草次の如し。

ヒルムシロ

サンカクキ

タマガヤツリ

ホタルキ

ホシクサ

アギナシ

コナギ

ミゾカクシ

チヤウジタデ

ヒデリコ

チドメグサ

フタバムグラ

ハナヒリグサ

タカサブロウ

スズメノタウガラシ

キツネノマゴ

ウナギツカミ

ヤノネグサ

ミツビエ

畦畔に多きものは次の如し。

ミヅスキ

イタチガヤ

ヤマキ

アゼガヤツリ

ハヒキビ

リンダウ

クルマバナ

アヲツヅラフヂ

ヒメクグ

ギヤウギシバ

尙河邊附近に於てはススキ、ホウライチク、コモチシダ、スヒカヅラ、ハギ、ホシダ、ヘラシダ、ヤマアザミ、ドクダミ、ツルシノブ、ツハブキ等の混生するあり、又ヒサカキ、エゴノキ、カハヤナギ、アキグミ、マサキ、モクレイシ等の灌木を生じ時に「ソテツ」の自生せるを見る所あり、

### 五、牧場と栽培植物

#### (一) 食用植物(作物)

牧場の畑地は新開地なるが故に幾分か栽培植物の限定せらるゝものありと雖も其の土質の餘りに劣悪ならざるを以て多くの作物は栽培して相當の結果を見るが如し、最も適せる作物

として第一に擧ぐべきは蕎麥、陸稻、甘藷、菜種の四種にして次に可なるは小麥、落花生、大根、西瓜  
其の他の蔬菜類なりとす。

落花生に奇なるは後にも述ぶるが如く莖葉の發育良好にして開花亦可なるも結實するもの  
甚だ少きことなり、即ち子房土中に入りて後其の殻の形成は充分なるも肝要なる中の種子の  
充實せるもの殊に少く殆ど無益に終ることありと云ふ、蓋し土質未だ熱せず細菌の作用の完  
全ならざる故かと思はる、又大根にありては其の生育甚だ良好なれども惜しきことには虫害  
を被むること多く農民の遺憾とする所なれども之等は播種期、肥料の種類を考慮し充分の驅  
除法を行は、其の害を減ずることを得べしと信ず、瓜類の生育は一般に甚だ良好なりとす、然  
るに粟は里人の談によるに不適なるが如く其の發育不良なりと云ふ、されども少し土地の熟  
するに至らば亦相當の收穫を得るに至るべしと信ぜらる。

牧草の適否如何を聞くに禾本科に屬するものは播種後の發芽及生育稍々見るべきものあれ  
ども荳科に屬するものは殆ど發芽せざるか又發芽するとも甚だ不良にして遂に何等用をな  
すに至らずして枯死すと云ふ、蓋し牧場の土質が未だ其の生育に適せざるを主因とすべく元  
來該場雜草の主成分は禾本科植物にして荳科に屬するものは僅に「ハギ」「ヤハズサウ」等の如く  
比較的乾地を好む植物なり、斯る土地に舶來の新品種を而も突然此の未熟の畑而も乾燥地  
に於て他の種類と同様に播種栽培せしとして如何にか豫想の結果を得らるべき、故に暫くの間  
他の牧草或は蕎麥、甘藷、菜種等を栽培し施肥耕耘を頻繁にし新墾地をして熟畑たらしむるに  
勉め然る後荳科の牧草を播種せば蓋し豫想の收穫を得らるべし、若し初めより各種の牧草を



栽培せんとせば多くの肥料と莫大の手敷を要し又適當の灌漑を行ふ要あらんか。

## (二) 工藝植物(作物)

本牧場内には工藝的に利用せらるゝ植物の自生するあれども(後方植物誌参照)未だ工藝作物として栽培せらるゝもの無し、然れども今後開墾の行はるゝと共に其の土質其の氣候に適する諸種の特用作物を栽培するは種々の方面に利益あることなりと信ず、今日其の種類に就て云々するは誠に早計に失するの嫌あれども余が今回の調査によりて適すべしと思惟したる種類を列擧して後日の参考に資せんとす。

### 1. 茶

樹 特別に茶畑を劃して栽培するも可ならんも先づ田畑の周圍に植ゑ一は防

風林の代用とするも面白かるべく山際傾斜急なる地、畑とするに足らざる地にもよく生育し又風害にも抵抗性大なる故に副業的に栽植して有利なりと信ず。

### 2. 櫨

樹 昔は之ありと云ふも今は見ること難し、藩政時代には山野に自生したるも

の多く命じて切らしめざりしが近年に至りて其禁制無きに至りし爲隨時伐採して製糖の際の燃料に供し終れりと云ふ、是れ蓋し一は其の需用減退せしと交通の不便の致す所なるべし、然れども尙之が適地には相違なく適當なる方法によりては栽植して利あるべしと思はる。

### 3. オリーブ樹

比較的風害にも強く土質を選ぶこと少き植物なる故當場の原頭或は斜面に栽培して可ならん、而も其の畑は株間に牧草等を混作するを得べし。

4. 琉球芭蕉 即ち纖維芭蕉なり、此の氣候に於ては適すべしと思はる、風害を忌むもの故山林谷間等陰濕地を可とすべく、之が爲特に畑を設くるの要なく林内草地に點植せば足るべし。

5. 芋 麻 印度、馬來、支那、日本至る所に自生あり、溫暖鬱濕の氣候を好むものなるが故に、牧場内傾斜地、低地等に植ゑて效あるべし、風害に對しても他の纖維植物の如く弱からず其の繁殖も分根等によるが故に甚だ容易なり。

6. 黃 麻 是亦濕潤炎熱の氣候を愛す、多少風害を恐るゝが故に低地に植ゑ又は防風樹ある畑を可とす。

其の他楮、三椶等多少溫帶性の作物なれども山間に植ゑて不可なかるべく又水田、濕沃附近に於ては苜蓿或は藺草等も適せざるに非ざるべし、殊に苜蓿は古來種子島を経て傳來せしとの説もある程なれば栽植せば有利ならんか、其の土質も淺き砂質壤土を可とし溫暖濕潤なる氣候を好み生育期間亦短き等の點は我が牧場は其の適地なるべし、尙又養蠶の目的の爲桑樹の栽培も適すべし。

#### 六、牧場と應用植物

牧場内自生の植物にして諸種の用途を有するものは後編植物誌に於て詳説したり、茲には唯其の梗概を記述するに止むべし。

1. 建築材 古來より用ひ來りしものは「タヅノキ」及「シヒノキ」なりしと云ふも將來人口の増加、移民の増加等によりて他の諸種の材木を伐採するに至るべく現に今日

に於ては「スギ」「クロマツ」等の材を盛に用ふるに至りしと云ふ、故に一方之等の伐採をなすと共に杉、松等の植樹を怠らざるを要し、林内自生の他の林木も可成適當の保護を加ふるを忘るべからず。

## 2. 薪炭材

薪材としては殆とすべての樹木を利用せりと云ふも差支なし、只今後枯木以外の生木を取るに際して適當の保護増植を他方に行ひつゝするを要す。

炭材として當地附近に於て最も利用せるは「アラカシ」「マテバシヒ」「クヌギ」之は火を起す時「バチ」する性あれども火持可なりと云ふなり、將來其の不足を來さしめざる様注意するを肝要なりとす。

## 3. 椎茸材

當場附近に於て最も多く使用せるものは「アラカシ」「マテバシヒ」「シヒノキ」「コバンモチ」「モガシ」の五種なりとす、從て之等樹種に對する保護増殖亦緊要なりとす。

## 4. 木耳材

多く用ふるは「サンゴジュ」「ゴンズイ」「ヤマデキ」等なり、之等は林内には比較的多少し。

## 5. 器具材

普通に使用せるものは「フカノキ」「カクレミノ」「ウラジロガシ」「イイギリ」「ヤマビハ」「ムラサキシキブ」「トキハガキ」「サクラツツ、ジ」等を主なるものとす。

## 6. 染料材

種々あれども主なるものは「カンコノキ」「ハマモクコク」「カギカツラ」にして之等は樹皮を利用し、又果實よりするは「クチナシ」あり、又染料と云ふには非ざらんも果實より澱を取るものには「トキハガキ」あり。

7. 製粉植物 澱粉を製する主なるものは、ワラビ、クズ、ヤマノイモ、サツマイモ、カラスウリ等の草本あり。

其他尙樹液を利用するものには、トリモチを製する、モチノキあり、髪洗用に供せらるゝ、サネカヅラあり、又纖維を利用するものには、シユロ、コセウノキ等あれども、少數に止り、經濟上に影響するに至らず、又食用に供する果實を産するもの、又莖葉等を食するものあれども、詳細に互るが故に後編に譲るべし。

次に稍々趣を異にせることなるが本牧場には特に必要なるが故に一言附加すべきことあり、防風樹(又は防風林)之なり、既に此の役に供せんが爲に植ゑられたる植物には、アヂサキ、ニシキウツギ等あり、原野高地の畑に於ては風害を防ぐ上には是非ありて欲しきものなり、其の他に之に供し得べき樹種は次の數種あり、

「ヒトツバ」即ち「イヌマキ」「スギ」「ヤマヤナギ」「クスギ」「ハマヒサカキ」

右の中「ヤマヤナギ」は其の材白蟻の害を蒙り易きが故に寧ろ好ましからず、又「クスギ」は畑地の爲めには落葉を以て肥料となり樹勢強大ならずして可なるも冬季の風に對して無効なる不利あり、「スギ」は可なるも畑の爲めにはあまり好ましからず(生長早くして畑に蔭をなす、されども牧場の土質には好適なり)故に最も可なるは「イヌマキ」を以てするにあり、常緑にして而も其の生長遅く、よく防風の目的を達し得べし、又目下既に植ゑられたる「アヂサキ」「ニシキウツギ」も勿論可なり、或は既述の茶樹桑樹等を以て防風樹の代用となるも亦可ならずとせじ。次に應用植物の一部として茲に併せ敍すべき事實あり、即ち、

## 一、牧場と蜜蜂飼養

牧場は其の地勢及氣候よりして蜜蜂の飼養に適すべき地なるを思ふと共に蜜源植物として蜂の好みて群集するもの亦少しとせず、其の主なるもの次の如し。

「シヒノキ」「マテバシヒ」「アカメガシハ」「クヌギ」「モチノキ」「スヒカヅラ」

其の他多くの草花は四季を通じて開花するもの多く森林樹木中にも尙多くの蜜源植物多かるべし、又今後住民の増加により或は特に牧場畜舎管理所附近に諸種の花卉類を栽植することゝならば蜜源に於て困難することなかるべしと信ず、唯恐るべきは暴風雨の襲來なり、僅々半日一日位にて止まば可ならんも數日間引續きて止まざることあらば之によりて受くる被害甚だ大なるべし、故に之が設備其の他具體的方法に至りては細密なる熟慮を要すべく未だ俄に斷ずべからざるものあり、然れども夫れ以外の諸般の事項の多くは該地に之が飼養を行ひて支障あることなからんと信ず。

## 二、森林と家畜運動場

冬季の寒風、夏季の烈日に對して或は防風避寒の屋根となり或は遮光蔭影を與ふるの傘となりてよく外界の溫度を調節するは森林なり、普通の場合には廣莫たる原野に放牧して何等差支あることなきも寒暑兩極の氣候に際して家畜を安全に且つ適當の運動を行はしむる目的にて之を森林内に放つは種々の點よりして利あることなりと信ず、勿論之に充つる森林は大なるを要せず、牧場内の谷間、傾斜地等に點在せる小森林を利用し、其の下木を適當に刈り家畜の通行運動に便ならしむる様にせば足れりとす、之には可成畜舎に近接せる小林を利用するを

便とし勞少くして管理の行届く様設くるを可とす、

## 七、種子牧島場植物誌本論

### 序言

我が種子島牧場の地たる僅に一方里内外の小區域なりと雖も山あり丘あり森林あり田畑ありて自ら植物の種類に富めり、若し夫れ之を植物學的に研究せんか其處には甚だ興味深き事實の多々あるを發見すべし、然れども茲に逐一之を詳説せんとせば其の殆んど盡くる所を知らざるが故に今は只本牧場産の植物の目錄を掲げ之等植物に對する該地方の方言、用途及び牛馬の嗜好等を略説して以て本牧場の植物誌となさんと欲す、然れども固より只一回の調査なれば未だ其の全を盡し得ざるは明かなり、故に後日更に機會を待ちて本植物誌の完成を期せんとす。

左に述ぶる所の方言竝に用途等は殆んど該地在住の本校囑託長野猪之助君より聞き得たるものなりとす。君や既に類齡、而も積年の注意と熱心とは善く今日余をして會心の調査をなさしめたり、茲に記して謝意を表す。

本誌中の植物の學名は煩雜を避けんが爲之を省略し各科を自然分類の順序によりて配列したり。

### 植物誌

#### 一、苔葱科

Hymenophyllaceae.

○ツルホラゴケ 方言「ヤマジウゼン」牧場内森林中の陰地に於て他の樹木に纏絡して生活する植物なり、何等用途無きも之が老腐木に纏絡せる者は庭園に置きて一興あらんと思はる。

二、 杉ハゴ櫨科 *Cyathaceae.*

○ヘゴ 方言「ヘゴ」牧場北部鬼ヶ澤山森林内の低湿陰地に自生あり、大形なるもの少し、里人が之を以て經濟的に利用せる者あるを聞かず、只其の材は盆栽の蘭類を植うる臺として用ぶるを見るのみ。

三、 水龍骨アマネカヅラ科 *Polypodiaceae.*

○ワラビ 方言「ワラビ」原野、主として乾燥せる部分に多く生ぜり、牛馬は若き莖葉にても餘り好まず、人々は若き莖葉を採集し歸りて一晝夜計り水浸したる後種々の料理に供す、又澱粉を製す、其の法先づ根を掘りて水洗し更に尙二日位水に浸漬せる後細碎して之を布に入れて搾り液を沈澱せしめ後上澄液を去りて乾すにあり。

○ホシダ 方言「マネーバ」馬は好食するも牛は餘り好まず、子供は莖の皮を去りて中の髓を取り出し之に餌を結付けて川蝦を釣るに供す。

○ホラシノブ 方言「インネーバ」蓋しイヌネーバの意か、牛馬共に食す。

○コモチシダ 川邊に多し。

○タマシダ 方言「イントンボウ」馬は好食す。

○イシカグマ 方言「コージネバ」牛馬共に不食、里人は麴製造の際此の葉を以て上より麴を蔽ふ時は蟲來らずして結果良好なりと稱し、夏時殊に用ふと、蓋し羊齒類は一般に蟲害を被る

こと稀なる故一は其の來るを防ぎ一は葉面より蒸發する水分によりて麴に適當の濕氣を與ふるものならん、此の種のみならず他の羊齒類も殆ど皆麴製造に用ふ、屋久島にても亦然りと云ふ。

○ミゾシダ 方言、インネーバ「牛馬共に好食す。

○ヒトツバ 林中にあるものにして他の樹の上に發育せり。

○マメヅタ 方言、クロメカヅラ「の一種、林中の樹木に附着す。

○ヘラシダ 場内の川邊、林中に多し。

○キンマウキノデ 山林中の陰濕地に多し。

○イハビトデ 同上。

○ハチシヤウシダ 同上。

○シロヤマシダ？ 同上。

○ヤマヲラビ(新稱) 方言、ヤマヲラビ「林中の陰濕地に生ずる大形のツラビなり、里人は其の地中より出づる幼莖を採りて食用に供す、未だ和名なかりし故方言によりて命名せり

○オホタニワタリ 「サルゴザ」と云ふ、森林中の大木に着生す、盆栽に可ならん。

○ベニシダ 「ヤマネーバ」と云ふ、亦林中の羊齒類なり。

○エダウチホンダウシダ 林中にあれども多からず、盆栽に適すべし。

○オホキシノワシダ 林中低溫地に多く群生す。



○ウラジロ 方言「スダ、モロバ、シャウグワツスダ」牛馬好食す、正月神前の裝飾に用ふる故に「正月スダ」の名あり。

○コシダ 方言「ヘゴシダ」林中よりも寧ろ原野に多し、馬は稍食するも牛は食せず。

五、海金砂科 *Schizaceae*.

○ツルシノブ 牛馬や、食す。

六、薇科 *Osmundaceae*.

○ゼンマイ 方言「フクワラビ」牛馬は若芽は食すれども老成せしものは食せず。

七、觀音座蓮科 *Marattiaceae*.

○リウビンタイ 方言「マナツ、マナツグサ」莖の基部より折取る時は其の断面恰も馬蹄の状をなす故に此の名あり、「マナツ」は即ち「ウマノアシ」の意か、南種子村の住民は其の莖の基部を切りてよく煮て食用に供すと云ふ。

八、石松科 *Lycopodiaceae*.

○ミヅスギ 水田附近の雜草なり、

九、蘇鐵科 *Cycadaceae*.

○ソテツ 方言亦「ソテツ」なり、種子を食用に供す、莖も亦凶年の際飯の代用となす、中種子村、南種子村の住民は動々もすれば之を食すと云ふ。

一〇、一位科 *Taxaceae*.

○イヌマキ 方言「ヒトツバ」林の附近にあり、未だ自生なるや不明。

一一、松杉科 Pinaceae.

○スギ 建築材。

○クロマツ 方言「マツ」同上。

一二、眼子菜科 Potamogetonaceae.

○ヒルムシロ 水田中の雑草なり。

一三、澤瀉科 Alismataceae.

○アギナシ 水田中の雑草なり。

一四、禾本科 Gramineae.

○ススキ 方言も亦「ススキ」と云ふ、若き莖葉及老成せるものも牛は好食す、成熟せるものは刈りて屋根葺とす。

○チガヤ 方言「マカヤ」牛は食す、子供は根を食し又穂孕の時は其の穂を食す。

○ネズミノヲ 方言「カヤカブタ」の一種「牛馬好食す、普通の雑草なり。

○ヒメアブラスキ 方言「カヤカブタ類」若き時に牛馬食す。

○トダシバ 方言「カヤカブタ類」牛馬好食す、場内に甚だ多し。

○アブラスキ 方言「カヤカブタ類」ノヨシと云ふもの之ならんか「牛馬食す。

○アハ 牧場には餘り適せずと云ふ、土質の未だ馴れざる故ならんか。

○イネ 陸稻と水稻とあり何れも成績中等なり。

○ケカモノハシ 方言「カヤカブタ」カヤカブタと稱するもの、眞のものなり、牛馬共に好食す。

殊に若き者を喜び食す、里人は此の根を根櫛の原料として掘取る者少からず。

○ヲガルカヤ 「ノムギ、カヤカブタ」牛は早春新芽の際には食するも既に老成せば食せず、馬は何れの時にても食す、原野に普通の雑草なり。

○メヒシハ 方言「ホトクリ」最も好みて食する牛馬の飼料なり、而して牧場原野に最も普通のものなり。

○カリマタガヤ 方言「イトボトクリ」牛馬好食す。

○コブナグサ 方言「イトボトクリ」同上。

○スズメノヒエ 鹿兒島方言「ヤマボトクリ」同上。

○キンエノコロ 方言「アカボトクリ」同上。

○ギヤウギシバ 方言「ヤヘシバ」好食す、牧場低地に普通の品なり。

○ハヒキビ 方言「アシ」好食す、原野の雑草なり。

○ミヅビエ 方言「ヒエグサ」牛馬好食す、此の草生ずれば既に土質も餘程よくなりしを意味すと云ふ、人は其の實は食せず。

○イタチガヤ 低地に普通なり。

○ウシクサ 同上、牛馬好食す。

○ハヒヌメリ 牛馬好食す。

○ササクサ 方言「ヤマサシグサ」其果實が衣を刺すによりてサシグサの名あり、牛馬は好食す。

○ダンチク 方言「ダンチク」牛馬好みて食す、牛體に壁<sup>ダ</sup>蟻<sup>ビ</sup>發生せる時之れを食せしむれば脱落

すと云ふ。

即ち前夜約一把位を食せしむる時は翌朝に至り壁蝨は麻痺して落下すと云ふなり、大なる葉は取りて米を入れ以て角茅卷ツマキを製す。

○サタウキビ 「サタウキビ」牧場内にも栽培せり、専ら製糖用に供す、残滓は燃料とす殊に西の表に於てはオカベ豆腐のことを製する際の燃料として大に需用すと云ふ、牧場附近の農家は多くは腐敗せしめて田畑の肥料とす。

○ホウライチク 「キンチク」籠を製す、屋根藁のおさへとす、又子供は竹鐵砲を造る、牧場内川邊普通なり。

○マダケ 方言「カラタケ」竹幹は種々の用に供す、此の筍の皮は五月節句の際此の皮の中に灰汁に一晝夜位浸しおきたる糯米を入れて包み燻でて茅卷マキを製す。

○モウソウチク 方言「モウソダケ」幹は筧、細工物、竹箒、地下莖は烟草入として賞用し、筍は食用とす。

○シユズダマ 管理所前の川邊に自生せるを見る、牛馬亦其の軟き莖葉を食す。

一四、莎草科 カヤツリクサ Cyperaceae.

○テンツキ 方言「ヒケ」水田に多し、好みて牛馬之を食す。

○イガクサ 方言「ノヒケ」牛馬共に好食す、水田附近には少きも原野に多し。

○サンカクキ 水田の雜草。

○タマガヤツリ 同上

○ヤマキ 同上、牛馬食はず、方言「コマツナギ」。

○アゼガヤツリ 同上。

○ヒデリコ 方言「ヒケグサ」同上。

○イトハナビテンツキ 原野に生ず、他の雑草の下蔭にあり。

○ヒメクグ 水田の雑草なり。

○ホタルキ 同上。

○ナキリスゲ 方言「ノスルギ」野に多し、牛馬食はず。

○ウシガヤツリ 水田附近の雑草なり。

○ヒメテンツキ 原野に稍々多き雑草なり。

一六、 棕櫚科 *Palmae.*

○シユロ 方言「シユロ」牛馬用の綱、船用綱、葉は蠅叩き、材は小屋の柱。

一七、 天南星科 *Araceae.*

○テンナンシヤウ 方言「ヘビカラ」林中に稀に見るのみ。

○マンシウイモ 方言「バシカシハ」林中陰地に多し、サトイモに似て大形なる莖葉と芋とを有す、芋は食すれば口が腫れると云ふ、葉は味噌の蓋に用ふ。

一八、 穀精草科 *Ericaceae.*

○ホシクサ 方言「ヨメガイト」水田中の雑草なり。

一九、 兩久花科 *Pontederiaceae.*

○コナギ 水田中の雑草なり。

二〇、百合科 Liliaceae.

○ノヒメユリ 方言「ノユリ」牛馬好食す、原野に生ず。

○ツルボ 方言「スビラ」鹿兒島スナ「低地に普通なり、牛は好食す、根莖は人々百合と混じて煮食す。

○キキヤウラン 原野に稀に存す。

○クサスギカヅラ 原野に稀に生ず、今回は之を見ざりき。

○サルトリイバラ 方言「ククッラノコロ」牛馬あまり食せず、原野に生ずる蔓生類なり。

○サツマサンキライ 方言「ヤマククッラ」寧ろ林中に多し、カシハモチ「餅」方言「ククッラマンジウ」を製する時此の葉を以て包むなり。

二一、石蒜科 Amaryllidaceae.

○キンバイザサ 原野に稀にあり、方言「ノコバ」

二二、薯蕷科 Dioscoreaceae.

○ヤマノイモ 方言亦「ヤマノイモ」なり、昔よりかるかん饅頭に用ふ、又とろ、汁とし或は煮食す林中近くにあり。

○ヒメドコロ 前者よりも多し、何等利用せず。

○キクバドコロ 方言「トコロ」家屋の新築落成の祝の際此の根を掘りて神前に供ふる習慣あり但し人は食用にせず。

二三、 鳶尾科 Iridaceae.

○ヒアフギ 稀に原野にあり、牛馬あまり食せず。

二四、 襄荷科 Zingiberaceae.

○種名未詳一種 方言「シエクシヤ」林中にあり、ハナメウガに似たるも非なり、昔は之の實を採集して商人に賣りたるものなり、何かの薬にせしが今之を覺えずと云ふ、馬は葉を好食するも牛は左程好まず。

二五、 蘭科 Orchidaceae.

○ボウラン 方言「クツワグサ」馬の轡に似たる形なる故に此の名あり、林中の樹木に着生せり、盆栽にして可ならん。

○ホシケイ 方言「ツルラン」盆栽用、林中に生育せり。

○ムカゴサウ 方言「ノダン」野原に稀に見る、牛馬食はず。

○コクラシ 林中に生ず。

○トクサラン? 方言「エビラン」林中陰地の下草として生育し大形となれり。

○エビネ? 方言「ツルラン」? 同上

二六、 三白草科 <sup>カクシロクサ</sup> Saururaceae.

○ドクダミ 方言「バンドウ」鹿兒島「ガラツバ」低地の畑地に多き雑草なり。

二七、 胡椒科 Piperaceae.

○フウトウカヅラ 方言「ホートーカヅラ」林中にあり、牛は好食す。

二八、金粟蘭科 *Chloranthaceae.*

○センリヤウ 方言「センゲシヨウ」林中にあり。

○フタリシヅカ 林中の低濕地に多し。

二九、楊柳科 *Salicaceae.*

○ヤマヤナギ 方言「ノヤナギ」葉を牛馬食す、原野に點々生ず。

○カハヤナギ 牧場内川邊にあり。

三〇、楊梅科 *Myricaceae.*

○ヤマモモ 方言「ヤマモモ」實を食用に賞用す。

三一、殼斗科 *Fagaceae.*

○シヒノキ 方言「シヒ」林中に存す、野原にも稀に小形のものを見る、葉は冬季の飼料として用ふ、實は生食、又は煮食、材は建築材とし又椎茸の培養に用ふ。

○マテバシヒ 方言「マテ」林中に普通なり、葉は冬季の飼料とするも牛は馬の如く好食せず、花時には多くの蜂類群集す、椎茸培養の材に用ふ。

○クヌギ 方言「ドングリ」牧場原野の傾斜地に甚だ多し、五六年生位のものを主とす、若き葉は牛の飼料とす。

○アラカシ 方言「コーカシ」林中に普通なり又原野各所に點在す、葉は冬季の飼料に供すれどもあまり好みて食せず、實はカシノミと稱す、食せず、椎茸材とす。

○カシハ 方言「ナラ」牧場の北部傾面に多く管理所、牛舎附近に多しとす、葉は櫛餅を包むに用ふ



○ウラジロガシ 方言「シラカシ」林中に存す、材木として用ふ、種油を搾る時杭として漸次打込むものは即ち之なり。

三二、榆科 Uimaceae.

○エノキ 方言「エノキ」林中に存す、木耳キクラゲがよく生ずる故材は材木としてよりも寧ろ木耳の培養に用ひらる。

三三、桑科 Moraceae.

○ヤマグハ 方言「ヤマクワ」林内にあり、大木は見ざるも養蠶期に至れば里人林の中に入りて採葉すと云ふ。

○クハクサ 方言「ノイチブ」蓋し「ノイチビ」の意か、低地の雑草、牛はやゝ食す。

○アコウ 方言「アコウ」林内に大木あり、材を盆其他の器具とすることカジマルに於けると同様なり。

○イタビカヅラ 方言「タブカヅラ」林内の樹木に纏繞せり、牛は葉を食す。

○イヌビハ 方言「インタブ」イヌタブの意なり、牛馬は葉を好食し子供は實を食す。

三四、蕁麻料 Urticaceae.

○ヤナギイチゴ 方言「ハントウ」林内に見る、馬は食す。

○ハドノキ 方言「ハンドウ」林内にあり、牛馬共に葉を食す。

○クサマヲ 林中の低湿地にあり。

三五、檀香料 Santalaceae.

○カナビキサウ 方言「カナビキサウ」原野に稀に見る、禾本科植物への半寄生植物なり。

三六、馬兜鈴科 ウマノスズクサ Aristolochiaceae.

○カンアフヒ 林中の陰地に見る。

三七、蓼科 Polygonaceae.

○ウナギツカミ 方言「イデグサ」水田の雑草なり、多く生ずる時は田は瘠せると云へり、牛馬はあまり多くは好まず。

○ヤノネグサ 方言「アキグサ」水田の雑草なるが之が生ずるに至らば田も餘程肥えたるなりと稱す、牛馬好食す。

○イヌタデ 方言「ヤマアキ」水田の雑草。

○ソバ 方言「ソバ」開墾地に栽培せるを見る、甚だ適せるが如く生育良好なり。

三八、莧科 Amaranthaceae.

○キノコヅチ 方言「サシグサ」水田附近及林内水邊の雑草なり、其の果實着衣に附着し容易に離れざるを以て此の方言あり。

三九、毛茛科 ウマノアシタマ Ranunculaceae.

○オキナグサ 方言「キーバナ」原野に見る雑草なり、其の葉の若き時は牛馬共に食するも老成せるものは食はず。

○シウメイギク 方言「ノギク」原野の低地に稀に見る雑草なり、牛馬あまり好まず。

○ポタンヅル 原野に生ずるも數甚だ少し。

○キツネノボタン 水田附近家屋附近に普通の雜草なり。

○センニンサウ 方言「タカタネカヅラ」原野の處々に生じ他の草木に纏絡せり、牛馬共に好食すれども齒脱落し易くなる故食せしめざるを常とす、人も咬めば齒落つと云ふ。

四〇、防巳科 *Menispermaceae.*

○アヲツヅラフヂ 方言「ウバカヅラ」原野に普通なり、牛馬食す。

○ハスノハカヅラ 方言「ウバカヅラ」同上、牛は甚だ好みて之を食す。

四一、木蘭科 *Magnoliaceae.*

○サネカヅラ 方言「ナメラカヅラ」原野に見る蔓生類なり、此の植物の浸出液を婦女の髪洗用に供す、即ち莖を叩きて汁を搾るか又は皮を削りて水浸すること一晝夜にして油狀となりたる粘液を用ふるなり、車輛の油にも之を以て代用すること屢々なり。

○シキミ 方言「シキブ」林中にあれども多からざれば之を利用するを聞かず、只花時佛前に供ふる位なり、高隈演習林附近にては「マッカウ」と稱し香油原料として花を採取す。

四二、樟科 *Lauraceae.*

○アヲカゴノキ 林中に見る喬木なり器具材とす。

○クスノキ 林中に稀に見る、量甚だ少き故樟腦製造等のこと之無し。

○ヤブニクケイ 方言「インゲーシノキ」蓋しイヌニクケイの意なり、薪材としてよく燃焼すれども割木とすること困難なり。

○シロダモ 方言「スッワギ」林中普通の常緑樹なり。

○カゴノキ 方言「トギノキ」同上、材木として利用するのみ。

四三、十字花科 Cruciferae.

○ナタネ 新開地の所々に其の栽培を見る、成績可なりと云ふ。

四四、茅膏菜科 Droseraceae.

○コマウセンゴケ 低湿なる原野傾斜地等に生ずる小植物なり、其の葉はよく小昆虫を捕ふるを以て珍なりと稱せり。

四五、虎耳草科 Saxifragaceae.

○アヂサキ 方言「アヂサイ、アンサイ」畑地の防風樹として適す、牛馬は餘り食せず。

○マルバウツギ 淺き林の附近に稀に見るのみ。

四六、海桐科 Pittosporaceae.

○トベラノキ 方言「トベラ」林中に存す、山羊は好んで其の葉を食す。

四七、金縷梅科 Hamamelidaceae.

○イス 方言「ユス」林中に生ず、庭木とす又薪材として第一なりと云ふ。

四八、薔薇科 Rosaceae.

○キンミヅヒキ 方言「サシ」原野に普通に存す、牛馬は其の若き時を特に好食す。

○ワレモコウ 方言「ボウズバナ、スイクワバナ」若芽の際西瓜の香ありと云ふ、原野に普通雑草なり、牛馬は食はず。

○キシムシロ 原野に普通なり、牛馬や、食す。

○ミツバツチグリ 同上

○フユイチゴ 方言「トライチゴ」淺き林内の陰地に生ず、冬間其の實を食用とす。

○ナハシロイチゴ 方言「タカイチゴ」五六月の頃其の實を食ふべし。

○ホウロクイチゴ 方言「カシハイチゴ」シヲヅイ「ヅイ」とはヅル(蔓)の意なり、鹿兒島にては之を「タカイチゴ」と云ふ、夏日其の實は食用とすべく其の葉は牛馬の好食する所なり、殊に之に就きて面白きは開墾の際此の植物の生育せる下土は土質甚だ良好なりと云ふ、人々は此の莖根を掘起すに大なる勞力を要するも其の土質佳良なるの故を以て喜ぶと云ふ、蓋し年々根際に落る大形厚質の葉は逐次腐敗して有效なる養分となるによるべし。

○Rubus sp. 方言「キイチゴ」原野所々に見るものなるが未だ學名和名を知らず、夏日甘味多き實を結ぶ。

○テリハノイバラ 丘地の蔓生類なり、刺を有する故牛馬餘り食はず。

○ハマイバラ 方言「ハーダ」同上、牛馬食すと云ふ説と食せずと云ふ説の二あり、何れにするもあまり好食するものに非ず。

○ハマモクコク 方言「ヘワリ」鹿兒島へハル「元來海岸樹なれども原野低地に稀に見る、此の材は木槌を製するに用ひられ又皮は之より優良なる染料を得て網等を染む、大島にては之を「テーチギ」と稱し大島紬の染料を製すと云ふ。

○ヤマザクラ 方言「サクラ」森林中に點在す、老木多し、俗に云ふ「ミヅザクラ」と「ヒザクラ」の二種あり各々稍々趣を異にす、然れども今確實なる學名和名を知らず、早きは三月中旬より開花

し三月下旬乃至四月上旬は最も盛なり、早春常緑樹の間に之を望む景色は他に於て亦見難き所なりとす、偶々三月の節句に相當する頃なればツ、ジと共に之を神に供す、又花は鹽漬として茶の代用にす。

花の鹽漬法は先づ新芽、蕾、花等を混じて共に摘み取り水洗して後乾して適當に水分を去りしものを鹽と適宜に混合して壺内に漬けるにあり、然る後は隨時之を取出し茶碗に二三點入れて白湯を注げば即ち芳香馥郁たる茶を得べし、里人及移住民等は好みて之を製し年中貯ふと云ふ。

四九、 荳科 Leguminosae.

○ヒメクズ 原野に見る小蔓生類なり、牛馬好食す。

○ハギ 牧場内に最も多き植物の一なり、秋の夕に鬼ヶ澤山に澄む月影を賞し萩が枝に宿る玉の露を愛づるの風流は無くとも秋日原野を飾る植物として春の櫻にも比すべけんか、木質化する宿根性草本なるが故に畑地の開墾に際しては少からず勞を要すと雖も元來荳科植物なるが故に其の後の結果は良好なりと思はる、牛馬は未だ木質化せざる軟き莖葉を食す。

○カハラケツメイ 方言「スズコ」原野に生ず、刈りて乾し以て茶の代用とす。

○タヌキマメ 原野に所々見るも多からず、牛馬食す。

○ハヒメドハギ 方言「サウハギ」の一種「原野の雜草」なり。

○ヤハズサウ 方言「サウハギ」の一種「原野に普通なり、牛馬好食す」。

○クサハギ 方言「サウハギ」方言「サウハギ」の眞の種類なり、蓋し草萩の意なりと思はる、原野、路

傍に多き植物なり牛馬好食す。

○ミヤコグサ 方言「コガネグサ」原野、寧ろ低地に多き植物なり、牧草として栽培せらるゝ程なる故に牛馬好むこと甚だし。

○ヌスビトハギ 方言「ヤマサシ、ベツタリザシ」衣に附着して離れ難き故此名あり、牛馬は其の若き莖葉を好食す。

○オホバナヌスビトハギ 方言「ヤマサシ」の類、林中陰地に稀に見る。

○ナツフヂ 方言「ノフヂカヅラ」原野及淺き林内に稀ならず、牛馬は共に食す。

○クヅ 方言「クズカヅラ、カンネカヅラ」方言「カンネ」とは即ち澱粉の意なり、農閑の際林中に入りて其の根を掘り歸り槌にて打碎きワラビに於けるが如き方法によりて製粉す、其の大形の葉は牛馬の好食する所なり。

○ナンキンマメ 方言「ナンキンマメ、ラツケシヨ」場内の新開地に栽植するに莖葉は中等乃至良好の發育をなすも土中に入りし子房の發育極めて不良にして殆んど殻のみにて種子を生ぜずと云ふ、蓋し土壤が新開地なるにより腐植質物、窒素等に比較的富むが故に根瘤菌の發育に適せざるかとも思はるゝも寧ろ土壤新しき爲根瘤菌の數少きに因するが如く思はる尙繼續栽培するによりて良好なる結果を得るに至らんと信ず。

五〇、ゲンノシヨウコ 牻牛兒科 Geraniaceae.

○ゲンノシヨウコ 方言「セキリサウ、インゲシヨウ」原野低地に生ずる草本なり、激烈なる下痢症に對しても此が浸出液を服すれば止むと云ひ古來醫藥に用ふ。

五一、酢漿草科 Oxalidaceae.

○カタバミ 方言「コガネグサ」と云ふも、萱科のミヤコグサと混同せるによるべければ、之は不當なり、場内の低地にあり、牛馬好食すと云ふ。

五二、芸香科 Rutaceae.

○カラスザンセウ 方言「イゲシラキ」淺き林の附近に存す、用途なし。

○イヌザンセウ 方言「ヤマザンセウ」同上、牛馬は食はず。

○ハマセンダン 林内に稀に存す。

○Citrus sp. 方言「コズ」林中に散見する蜜柑の野生と覺しき一種なり、方言「コズ」とは蓋し「コウジ」の意ならん、然れども「コウジミカン」なるものは此地方に之を見ず、恐くは宮崎附近に存する「タチバナ」に類するものならんか、子供は其の果實を生食すれども酸味甚し、里人は果液を取りて酢の代用とし、之を刺身等に注ぎて食す、又果實の内容を去りて之に味噌を填充し、適宜に切りて食用に供す。

五三、遠志科 Polygalaceae.

○ヒメハギ 方言「ノエンドウ」原野普通の小草なり、牛馬好食す。

五四、大戟科 Euphorbiaceae.

○ナツトウダイ 方言「ノウルシ」蓋し「ノウルシ」の意か、莖葉を折れば白き乳液を滲出する性あり、牛馬は食はず、一般に之の類の草は軟さも乳液に苦味ある故にや、牛畜忌みて食せずと云ふ。

○コミカンサウ 方言「アキマサリ」原野に生ずるも畑地附近に多し、何の用なし。



○シマニシキサウ 方言「アキマサリ」畑地の雜草なり。

○イリオモテニシキサウ 方言「アキマサリ」同上、一般に之等の類を「アキマサリ」と稱す。

○アカメガシハ、原野、淺き林附近に普通なり、特記すべき用途なし。

○ユヅリハ 方言「ユヅリハ」材木として利用する外葉は冬季の飼料として牛馬に給す。

又正月にはウラジロと共に神前の裝飾に用ふ。

○ヒメユヅリハ 方言「ユヅリハ」林内に普通なり。

○カンコノキ 方言「ツバリボウ」林内に見る灌木なり、此の枝幹を細挫して、釜中に入れて蒸し其の煎液を以て漁網を染むと云ふ、佐多村に於ては此の皮を剥ぎ取りて染料に供すと云ふ。

五五、漆樹科 *Anacardiaceae.*

○フシノキ 方言「フシノキ」原野及び林の附近に見る灌木乃至小喬木なり、其の葉に所謂五倍子を生ず、之を方言「ハグロブシ」と稱し染料を製す。

○ヤマハゼ 方言「ヤマハシ」別に用途なし。

五六、冬青科 *Aquifoliaceae.*

○モチノキ 方言「ヤマモチ」鹿兒島「トリモチ」、材より所謂トリモチを製す、花時諸種の蜂殊に蜜蜂の群集するもの多しと云ふ。

正七、衛矛科 *Celastraceae.*

○テリハノツルウメモドキ 方言「ホシカヅラ」川邊、林内等に散見する蔓生類なり、牛は好むも馬は餘り好まず。

○モクレイシ 方言「ヒトヅキ」材として利用するは稀なり、多くは薪炭材とす。

五八、省沾油科 *Staphyleaceae.*

○ヤマデキ 方言「ハブタイ」林内に見す、材は木耳を作るに用ふ。

○ゴンズイ 方言「カラスマメ」葉は牛甚だ好食す、材は木耳を作るに用す、冬季間落葉の際材を切りて其の用に供す、若し時間を遅れて早春發芽の頃伐採せし時は木耳を生ずること甚だ少く殆んど無益に終ると云ふ、蓋し落葉期は貯藏養分が最も多く材幹に保留せらるゝ時なるによるべし。

五九、泡吹科 *Sabiaceae.*

○ヤマビハ 方言「ハシギ、ヤマビハ、又はスウノキ」林内に所々存す、木幹真直なる故にスウノキと云ふ、又昔日は祝箸を此の木より製せるものならざるべからずとして使用したる故ハシギの名あり、近年まで正月には必ず之の箸を用ひたるも世の推移と共に漸次廢して今は殆んど竹箸のみを用ふと云ふ。

六〇、葡萄科 *Vitaceae.*

○エビヅル 方言「ガレブ」鹿兒島「ガラメ」、原野、路傍に普通なり、牛馬共に食す、其の實は甘味多く子供の好食するものなり。

○ノブダウ 方言「ヤマガレブ」此の果實は前者よりも大形なれども味不良なれば子供も食せずと云ふ、若き莖葉は牛馬の飼料なり。

○ウドカヅラ 林中低濕陰地に蔓延せり。

六一、膽八樹科 *Elaeocarpaceae.*

○モガシ 方言「モガシ」材を利用し其のまゝ椎茸の材とす。

○コバンモチ 方言「ヤマアコウ」林内に見る亞喬木なり、材木を利用し牛は其の葉を食す、又材よりは椎茸を生ず。

六二、山茶科 *Theaceae.*

○ヒサカキ 方言「ヤマケダ」林内及原野の灌木なり、刈りて佛前に供ふ。

○ハマヒサカキ 方言「ケタ、インケタ」原野に稀に見る、畑の防風樹として可なるが如し。

○サカキ 方言「オホバユス、サカキ」枝葉は刈りて佛前に供す、材は薪炭材に用ふ。

○ヤマツバキ 方言「カタシ」葉は牛馬食はず、材は諸種の細工物を製するに用ふ。

六三、金絲桃科 *Guttiferae.*

○オトギリサウ 方言「ノコガネグサ」原野乾燥地に普通なり、牛馬食はず。

六四、堇菜科 *Violaceae.*

○スミレ 原野に普通なり。

○タチツボスミレ 同上。

六五、柞木科 *Flacourtiaceae.*

○イイギリ 方言「チロノキ」下駄材として賞用す、又砂糖樽の枠として用ふ、林内に所々之を見る

六六、瑞香科 *Thymelaeaceae.*

○イヌガンビ 方言「ノヒノヲ」原野に最も普通の灌木状草本なり、牛馬食はず、此の屬には鞞皮

纖維よく發達せるものあるが故に之も何かの用に利用出來得んかと思はるゝも纖維量少く且つ粗惡なるが如し。

○コセウノキ 方言「ヒノヲノキ」林内所々見る灌木なり、子供は此の皮を剝ぎ獨樂を廻す時の鞭となす、纖維甚だ強くして容易に手折るべからず、前者よりも寧ろ之を利用するを得策とするも林内に自生せる量甚だ少きを遺憾とす。

六七、胡頹子科 *Elaeagnaceae.*

○アキグミ 方言「グミノキ」葉は牛の飼用となり、子供は其の漿果を賞味す、牧場内原野に多き灌木の一なり。

○ナハシログミ 方言「サガリグミ」之亦原野内に少からず、實は食用とすべく若き葉は牛馬の食する所となる。

○ツルグミ 方言「トラグミ」林内に散見する種類なり、實は食用にせらるゝも今頃は食ふ者少くなりたりと云ふ、其の蔓は取りて箕の縁を造る。

六八、千屈菜科 *Lythraceae.*

○シマサルスベリ 方言「シラキ、サルスベリ、アカウナギ」皆其の木の狀より來る名なり、林内に其の喬木を見る幹恰もサルスベリの如し、屋根の垂木として其の材を利用す。

六九、桃金娘科 *Myrtaceae.*

○アデク 方言「ヒメガタシ」林内に自生するも甚だ少し、特記する程の用途なし。

七〇、野牡丹科 *Melastomataceae.*

○ヒメノボタン 野原に普通に生じ美花を開く、牛馬は好まず。

七一、 柳葉菜科 *Oenotheraceae.*

○チャウシタデ 方言「アキマサリ」の類、水田に普通の雑草なり、牛馬好食す。

七二、 蟻塔科 *Haloragaceae.*

○アリノタフグサ 原野に普通なる小草なり。

七三、 五加科 *Araliaceae.*

○キツダ 方言「ツタカヅラ」林内の樹木に攀絡す、牛は其の葉を食するも學校より來りし牛は好まずと云ふ。

○タラノキ 方言「タラツキ」其の若芽は食用とし材は下駄材として伐採す。

○フカノキ 方言「イモギ」林内に散在す、其の葉は冬季の飼料として牛馬に給す、材は下駄材となり大なるものは建築材に用ふ。

○ヤツデ 方言「ヤツデ」淺き林内に普通なり、冬季の飼料として用ふ。

○カクレミノ 方言「ヤヒラギ」牛は其の葉を食す、材は建築に用ふ。

七四、 繖形科 *Umbelliferae.*

○チドメグサ 方言「ニタグサ」田畑附近の雑草なり、仲々牛馬の好食する草なりと云ふ。

○ツボクサ 方言「ツボグサ」同上、牛馬好食す。

○ウマノミツバ 方言「サシ」林内濕地に生ず、牛馬の飼料とす。

七五、 山茱萸科 *Cornaceae.*

○クマノミヅキ 方言「ミヅシ」林内に散在す、生木を子供が弄ぶ時は「ウルシ、マケ」をなすと稱す。

七六、石南科 *Ericaceae.*

○サクラツツシ 方言「ヤマツツジ、ツツジ」林内所々に見ゆ、四月頃淡紅美麗の花を開く、里人は庭に植ゑて玩賞し、又材は床柱として其の雅致あるを賞す。

七七、紫金牛科 *Myrsinaceae.*

○モクダチバナ 方言「アクチ」林内に所々之を見るも材として何の用なし。

○タイミンダチバナ 方言「ヒツノキ」林内に普通なり、薪材として用ふ。

○イツセンリヤウ 原野低地、淺き林に普通なり。

○シシ、アクチ 方言「コガ」林中に散見す、材を利用す。

○マンリヤウ 方言「ダマノキ、フツチリノキ」林内に稀に見る小灌木なり、子供は其の果實を竹鐵砲の彈丸として用ふ、又ヒヨドリは好みて其の實を食すと云ふ、葉は亦牛の食する所なり。

七八、櫻草科 *Primulaceae.*

○コナスビ 田畑附近の雜草なり。

○モロコシサウ 方言「カハシカグサ」林内に散在す、葉を乾し之を簞笥中の衣服内に入れ置けば蟲の害を免ると云ふ、又甚だ強き芳香あるが故に蟲害を防ぐと共に衣服に佳香を與ふる爲にも行ふ、里人は石鹼の香よりも優ると稱し之を賞用すと云ふ。

七九、柿樹科  *Ebenaceae.*

○トキハガキ 方言「シブガキ」林内所々に自生せり、葉は牛に給するも食はずと云ふ、果實より

は澁を製す、材は之を鎌の柄として其の硬きを賞すと云ふ。

八〇、灰木科 *Symplocaceae.*

○カンザブロウノキ 方言「オホバギ」林内陰地に存す、何の用途なし。

八一、齊墩果科 *Stryacaceae.*

○エゴノキ 方言「コヤスギ」淺き林中あり、傘の轆轤に使用す、静岡地方にて、之を「ドロノキ」と稱し此の實を川上にて打碎きて流す時は下流の魚類爲に醉死すと云ふ。

八二、木犀科 *Oleaceae.*

○ネズミモチ 方言「ネリモチ」鹿兒島「イボタ」薪材として利用するのみにて他に特記すべきことなし。

八三、馬錢科 *Loganiaceae.*

○コフヂウツギ 原野低地にある小灌木なり。

○アイナイ 原野乾燥地に僅に生ぜる小草なり。

八四、龍膽科 *Gentianaceae.*

○リンダウ 方言「ノギキヤウ」水田の畦畔、原野に生ずる草本、牛馬食す。

八五、夾竹桃科 *Poeyniaceae.*

○テイカカツラ 方言「マサキカツラ」林内にあり他樹に纏絡す、牛は其の葉莖を好食すと云ふ。

八六、蘿摩科 *Asclepiadaceae.*

○スズサイコ 方言「ノツグ」稀に原野に生ず、小草用途なし。

○トキハカモメヅル 方言「ロクネンモドシ」蓋し六年戻しの意なり即ち其の蔓甚だ強韌にして六年も使用するも尙用に立つ位なれば其の儘棄るも心もとなく之を初め採り來りし林内に持ち行きて返すと云ふにあり。

○サクラン 方言「ツバキラン」林内の老木に附着せり、盆栽として賞玩す。

八七、旋花科 ヒルガホ Convolvulaceae.

○サツマイモ 方言「カライモ」新開地の所々に栽培せり、稍々適すると見ゆ、中等の出來榮を示せり、移住民某の作れる諸を試食せるに仲々の美味なりき、里人は單に蒸して食用とし又飯と共に煮て食す、茲に面白きは方言「コツバラゴ」と稱する餅を製することなり、其の法先づ甘藷の皮を剥ぎて丸切りとして乾し其のよく乾燥せるものを粉碎して甘藷粉カライモコを製す、即ち此の粉と糯米とを適宜に混じて蒸し臼にて搗く時は膨軟口に適するコツバラゴ餅を得、其の味恰も羊羹餅の如く甚だ妙なりと云ふ、里人は甘藷を切りて乾したるものを貯藏し冬季乃至三月頃の農閑の際取り出して之を製すと云ふ。

又甘藷より澱粉を製す即ち藷を水洗し大根下しに下し水と共に布に入れて固く搾り其の液を沈澱せしむることにあり、其の粕は馬の飼料として好適のものなり、甘藷收穫後の蔓は新しきものは牛馬の飼料に供し又其の儘鋤き込みて畑地の肥料とす。

八八、紫草科 ムラサキ Borraginaceae.

○チシヤノキ 方言「チシヤノキ」淺き林の附近にあり、葉は粗剛なる故牛馬は食はず、材は床の前縁として賞用し又煙草盆、木膳等の指物を製す、其他馬マ肥グワ方言「モーグワ」の梓として用ふ。



八九、馬鞭草科 *Verbenaceae.*

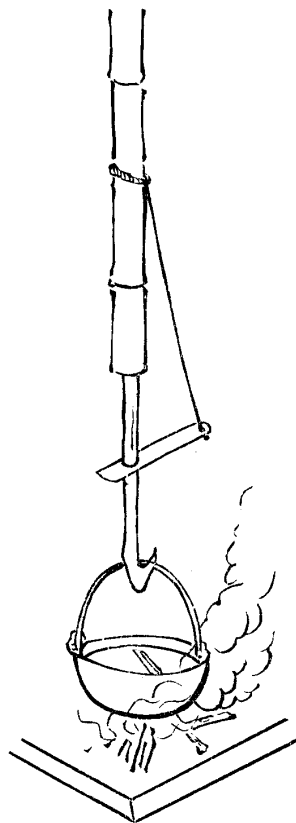
馬耙略圖

○ムラサキシキブ 方言「ゴメゴメ」林中に散見す、其の赤

き漿果は子供の玩具となる、材は堅き故諸種の指物(折敷盆等)の木釘として用ひ又幹の性真直なるが故に竹稈中に入れて所謂自在釣を製す。

○ハマクサギ 方言「ハーガラ」林内所々に生育す、馬の鞍の横木として腹への紐を結付く、然る時は其の材の臭氣によりて蠅の襲來するを防がるゝと稱せり。

自在釣圖



此の部分を作る  
(金棒を打込む)

○クサギ 方言「クサギ」林内所々に稀ならず、又野末等にもあり、材は別に用途なし、其の新芽は採りて種々の料理に用ふ、其の法先づ新芽を採集し來りて之に鹽を混じて揉む時は緑色の泡を多く生ず此の泡は甚だ苦味あるが故に之を去り芽を適宜に切りて汁に入れて煮る時はよき吸ひ物を得、春季筍と共に此の芽を煮る時は味亦格別なりと云ふ、若し之に豆腐を混じ種油の少許を加へて煮る時は其の味最も妙なりと云ふ、又此の葉の他の用途として擧ぐべきは牛體に蝨を生じたる時此の葉を燂でたる汁を以て洗浴せしむる時は蝨は容易に脱落すと云ふ。

## 九〇、唇形科 Labiatae.

- ウツボグサ 方言「ウマタバコ」原野に普通なり、牛馬共にあまり好まざる草とす。
- ヤマハクカ 之亦原野低地等に普通の草本なり。
- ヒキオコシ 方言「ウルヲ」山際に普通なり、別に用なし。
- チゴクノカマノフタ 畑地附近の雑草なり。
- クルマバナ 方言「ノハクカ」原野、低地に普通なり、牛馬共あまり好まず。
- ミゾカウシユ 方言「ノハクカ」同上、牛馬亦餘り好まず寧ろ食はず。
- アキノタムラサウ 方言「ノジソ」原野山際に普通なるも牛馬餘り好まず。
- エゴマ 方言「ヤマジン」牛馬好まず。

一般に此の科の植物は體中に一種揮發性芳香物質を含むが故にや牛馬の好む植物一も之無し。

## 九一、茄科 Solanaceae.

- ハダカホホヅキ 方言「インゲシヨウ」原野の陰地に普通なり。
  - シヤガタライモ 新開地に於て栽培せる所あれども薯の附き方甚だ不良にして少し許つ
- くも其の面甚だ粗悪なりと云ふ、本島にては別に澱粉等を製せず料理とするのみ。

## 九二、玄參科 Scrophulariaceae.

- タツナミサウ 原野陰地に生ずる小草なり。
- ウリクサ 田畑其他原野低地に普通なる小草なり。

○ゴマクサ 方言「ノゴマ」原野に稀に見ゆ、牛馬食ふ。

○ホソバノヒメトラノヲ 方言「カウヅ(マ)ノシツポ」カウヅマとは石龜の意なり原野に普通なる草木なれども牛馬は餘り好まず。

○スズメノタウガラシ 水田中の雜草なり。

○コシホガマ 原野に稀に見る雜草なり。

九三、列當科 *Orobanchaceae.*

○ナンバンギセル 原野の所々に生ぜるを見る、全體葉緑を缺ぎ體長三四寸の頃に淡紅紫色の筒狀花を開く、ススキ、チガヤ等の禾本科植物の根に寄生して生活を營む、里人は白色無葉加ふるに其の一種特別なるを見て珍として之を抜きて移植せんとするも根なくして如何ともする能はず甚だ不思議なる草として今尙命名せる者なしと云ふ。

九四、苦苣苔科 *Gesneriaceae.*

○ヤマビハサウ 方言「タバシカ」林内蔭地に見る草本なり、別に用途なし。

九五、爵牀科 *Acanthaceae.*

○キツネノマゴ 方言「ノハクカ」原野低地に普通なる雜草なり。

九六、車前科 *Plantaginaceae.*

○オホバコ 方言「ウンバコ」田畑、川邊等附近に普通なり、牛馬は好食す。  
葉を蒸して之を練りて腫れ物に附ける時は效ありと云ふ。

九七、茜草科 *Rubiaceae.*

○アリドホシ 方言、ハーゲ〔林内にあり刺ありて灌木なり。〕

○クチナシ 方言、クチナシ〔果實を染料に供するは人々の知る處なり。〕

○イハツタヒ 方言、クロメカヅラ〔林内の樹木に附着蔓延す。〕

○ツルアラキ 方言、ツカカヅラ〔林内蔭地にある蔓生類なり。〕

○サツマイナモリ 林内蔭地に生ずる草木なり。

○カギカヅラ 方言、ネコヅメ、キゴウ〔林内に自生する木質蔓生類なり、葉腋に枝の變形せる鈎を有す、其の狀猫の爪に似たる故此の名あり、木質化せざる時も牛は食はず、此の皮を剥ぎ取り煎汁を作りて魚網を染む。〕

○ヘクソカヅラ 方言、ヘクソカヅラ〔山際、林地附近にあり、一種の異臭を有するにより此名あり牛は好むも馬は好まず、但し學校の牛は食はずと云ふ。〕

○フタバムグラ 方言、ボヤグサ〔谷間の水田等に普通に生ずる雜草なり。〕

九八、忍冬科 スベカヅラ Caprifoliaceae.

○ガマズミ 方言、イセブノキ〔林内に所々見るのみ。〕

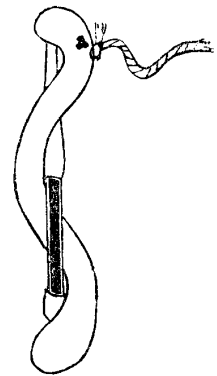
○コバノガマズミ 方言、イセブノキ〔同上、實は、イセブノミ〕と稱しヒヨドリノ好食するものなり

○ニシキウツギ 方言、ウノキ〔原野山際等に自生す、牛は其の葉を食するも學校の牛は食はずと云ふ、畑地附近に防風樹として植ゑたるが如きものあり、蓋し適當のものならん。〕

○サンゴシユ 方言、ハブタギ〔林内に僅に見たり、木耳を作るに用ふ、此の材は木耳が多量に生ずることにて於て第一なりとす、既記のゴンズイ〔方言、カラスマメ〕は品質はよきも其の量は少

しと云ふ。

スヒカヅ  
ラにて製  
せる煙管  
挿圖



管の代用を造るに用ふ。

九九、敗醬科 *Valerianaceae*.

○ヲミナヘシ 方言「キーバナ」黄花の意なり、野原所々に清姿を表はす、里人は採りて佛前に挿す牛馬亦其の莖葉を好食す。

○ヲトコヘシ 方言「ウマタバコ」原野に普通なり、其の若き莖葉を牛馬に與ふ。

一〇〇、胡蘆科 *Chenopitaceae*.

○カラスウリ 方言「カラスノスイクワ」原野低地、山際等に生ずる蔓生草本なり、牛は好食す、其の瓜状の果實より汁液を取りて婦女の髪洗ひ用に供し又其の汁を手足の皸につける時は效ありと云ふ、根は掘取りて澱粉を製す、鳥は好みて此の實を啄む故に「鳥の西瓜」と云ふ。

○アマチヤヅル 方言「カラスウリ」前者のことも「カラスウリ」と稱することあり或は同一視するならんかと思はる、原野低地、淺き林の中に存する蔓生草本なり、内地にては所謂「甘茶」の材料とすれども當場附近にては之を聞かず、馬よりも牛の方好みて食すと云ふ。

○スイクワ 方言「スイクワ」栽培せり、新開地には適するが如し。

一〇一、桔梗科 *Campanulaceae.*

○ツリガネニンジン 方言「ノギキヤウ」原野乾地に普通なる草本なり。

○ミゾカクシ 方言「ボヤグサ」水田に普通なる雑草なり。

すべて水田に生ずる雑草にして其の質柔軟にして盛に繁茂するものは皆之を「ボヤグサ」又は「ボヤボヤ」と總稱す、蓋し「茫々と生ずる」と云ふ形容詞より轉ぜしものならん、菊科植物には之等水田の雑草として生ずる種類多きが故に此の總稱によりて呼ばるゝもの少からず、菊科の部参照、一般に之等の「ボヤグサ」は養分に富み稍々良質の水田に於て其の繁茂著しきが故に「ボヤグサ」を生ずるに至れる土地を見て是れ既に熟畑(田)となりし兆なりと稱して里人の喜ぶも宜なりと信ず。

一〇二、菊科 *Compositae.*

○ヨモギ 方言「フツ」原野低地、田畑附近に普通の雑草なり、牛馬は好み食す、里人は屢々餅に混して食用に供す、毎年三月の節句には團子を作りて祝ひ「フツダンゴ」と稱して喜ぶ、又五月の節句には茅卷を製する外「フツ餅」を作りて神に供ふる等内地に異なる所なし。

○ヲトコヨモギ 方言「ノフツ」原野に普通なり、若き莖葉を牛馬に與ふ。

○ヒヨドリバナ 方言「ノバナ」同上

○サハヒヨドリ 方言「ノバナ」同上

○ノゲシ 方言「コマガヘシ」原野低地に普通なり、牛馬甚だ好食す、方言は「駒肥し」の意なりと云ひ又好食物なる故駒行き過るも再び後戻りして食するより「駒返し」と云ひしなりと云ふ、何

これにても牛馬の好食物なり。

○アキノノゲシ 方言「ノコマガヘシ」又は「ハナグサノ類」なり、原野低地に生ず、牛馬亦好食す。

○ヒメヒゴタイ 方言「ノコマガヘシ」原野乾地に普通なれども大形なるものは少し牛馬亦甚だ好食す。

○ヤマアザミ 方言「オニアザミ」原野低地に普通なり、牛馬食す、海岸近く生ずるハマアザミは之を單に「アザミ」と稱し里人食用に供す。(根を食す)

○ヤクシサウ 方言「ハナグサ」原野に普通なり、馬は好むも牛は餘り好まず。

○カウゾリナ 方言「ハナグサ」の類同上、牛馬好食す。

○アキノキリンサウ 方言「ハナガフ」又「ハナガラグサ」原野に普通なり、牛馬好食す。

○コヤブタバコ 原野低地淺き山林附近に生ず。

○オニタビラコ 原野低地に普通なり。

○シラヤマギク 原野に普通なり。

○イソベノギク 元來海岸性のものなれども牧場の原野にも亦少からず。

○ヌマダイコン 方言「サシグサ」の一種林中低濕地に生ぜり。

○シウブンサウ 之亦林中陰地に見る草本なり。

○ツハブキ 方言「ツハ」林内に生ぜり、冬季の飼料として用ふ、夏時は餘り食はず。

里人を之を採集して其の葉柄を燂で、皮を剥ぎ之を種々の料理に供す。

○メナモミ 方言「サシグサ」林中陰濕地にあり、牛馬食す。

○タカサブロウ 方言「ボヤボヤ」水田に普通なる雜草なり。

○ハナヒリグサ 方言「ボヤグサ」「ボヤボヤ」之亦水田に多き雜草なり。

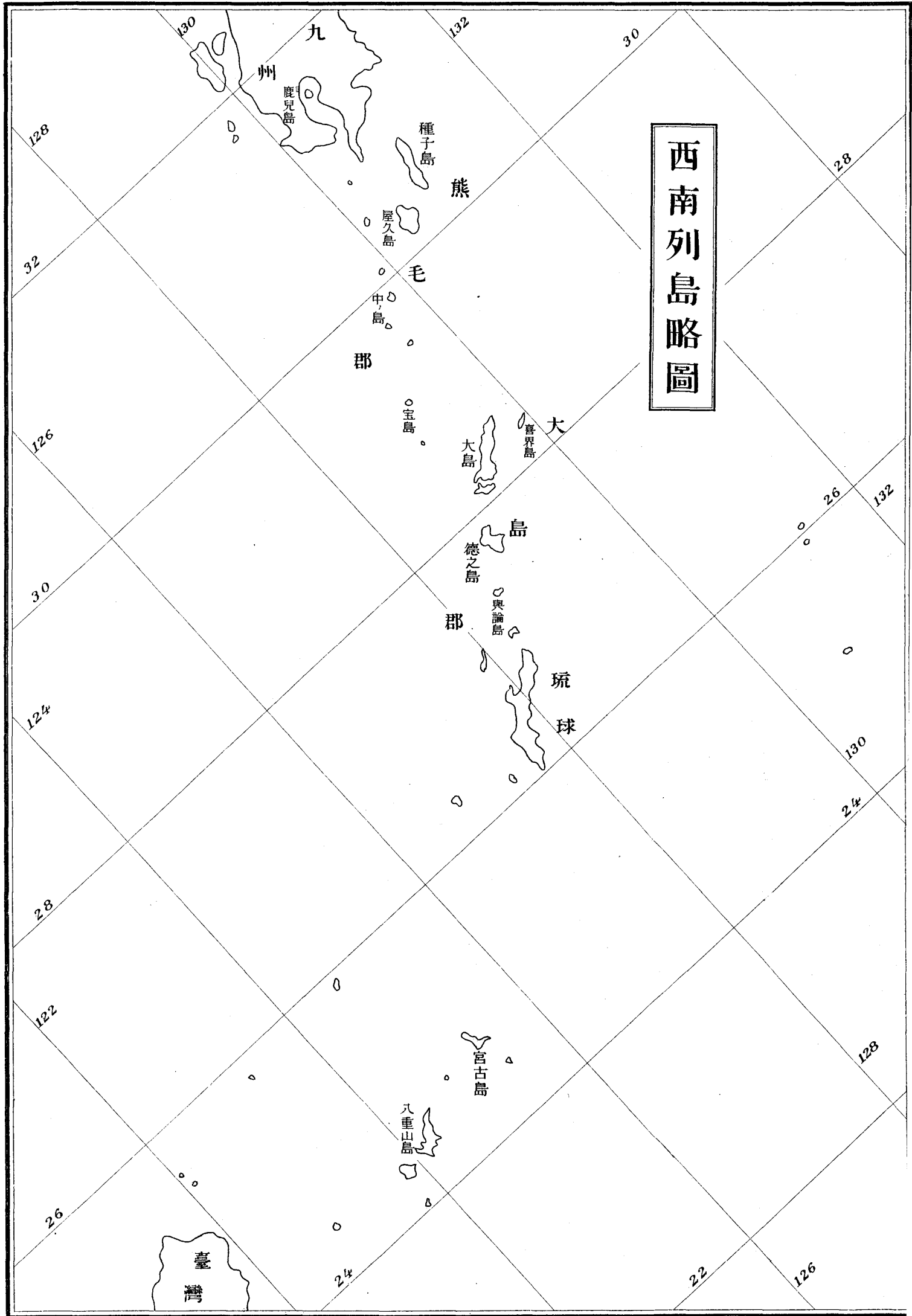
○キク 栽培品なり、「シマカンギク」なるものあるべきなれども余は遂に發見せざりき菊の花は只觀賞するの外亦茶として飲料となる、之を製するには櫻に於ける鹽漬法によるなり、其の法只異なるは葉を用ひざることにして花のみを摘みざつと水洗し適當に乾し之を鹽に混じて壺内に漬けること全く櫻の場合と同様なり。

#### 概 説

以上余の見たる本牧場内の植物は其の科數實に百〇二科に互り種數三百十二種を算す、各科に就きて最も多くの種類を含むは禾本科にして二十八種、次は菊科の二十二種、次は水龍骨科の十九種、次は莎草科及び荳科の十三種、薔薇科の十二種、桑科、大戟科、唇形科、茜草科の各八種なりとす、禾本科に富むは牧場の大部分が原野なるに基因し、桑科、大戟科、茜草科が他の科に比して種類多きは緯度低き地位なるを首肯するに足るべきか、只余が調査せしは正に中秋にして既に春季に發生せる種類の凋落枯死せる後なりしやの感あり、故に本誌上に洩したる種類も少からざるべく又今日見たる種類にても本誌上の記載全く完全なりと斷じ難ければ更に後日の調査研究によりて訂正増補を行ふの機あるべし。(終)



# 西南列島略圖



九州  
鹿兒島

種子島

熊毛郡

屋久島

中島

宝島

大島

喜界島

島

徳之島

興論島

琉球郡

琉球

宮古島

八重山島

臺灣